

はじめに

中川成美

国際日本文化研究理論研究会ではこれまで日本文化・文学に関する研究理論の互換的なシステムを考えるために、データ収集を行ってきました。つまり、日本文化・文学の研究はともすると日本だけで行われているような錯覚に陥るのですが、世界のあらゆる地域で規模の違いはあるものの、日本文化、および文学を対象とした研究は、日々伸展しています。同じテキストを読み、同じテキストを分析し、同じテキストに関する多くの研究書が発刊されている状況の中で、それらが相互に連絡しあわないという感を強く持っています。勿論、言語の問題がありますから、そう簡単にはいかないということも強く認識しています。しかし、もっとも文献資料をはじめとする研究素材を多く有する日本での、海外での研究を顧慮しない特徴には、長く疑問をもってきました。翻訳ということがもっと促進されればこの状況が解決されるかというところでもなく、要は各地域での日本文化・文学研究が独自の方法を編み出してそれぞれに形式化してしまっているなかで、それらが共通の研究課題をめぐって等価に交換し合うということは非常にめずらしいように思います。よく、海外は理論で、日本は実証研究などという大雑把な分け方を耳にしますが、それは誤解であり、理論も実証も共に揃って初めて研究という呼び方がなされると思います。

本研究会ではどのようにこれらの不幸な齟齬を解消できるかという設問をたて、現在活躍する日本文化・文学研究者をお呼びして、その方向を探ってまいりました。北米、中国、韓国などの東アジア、東南アジア、オーストラリア、ヨーロッパなど様々な地域から多くのゲストをお迎えしてきましたが、今回はセシル・坂井さんにお出でいただきました。

セシル・坂井さんはフランスにおける日本近現代文学研究の第一線に立たれ、意欲的なお仕事を次々に発表されていますが、1997年に朝比奈弘治さんの翻訳で出版された『日本大衆小説』（平凡社）は、まさしくどのように日本とフランスの日本近現代文学研究がコレスポンドするかという大変に重要な示唆を含んだ研究書でした。いま、坂井さんは日本現代文学史をご執筆中とうかがい、本研究会でお忙しいなかをお願いして話していただくことになったわけです。文学史というような形式の中にこそ、それぞれの思索の形がはいってくることになるかと思えます。ここを基点に相互が交換の可能性に向けて話し合っていくことができれば、どんなにすばらしいかと痛切に感じます。

付け加えて言いますと、文化や文学の研究がその分野自体で成立しているわけではなく、外部に置かれた多くの関係項の網目の中で、生成や編成を繰り返して出来上がっていくものだと最近特に感じます。その意味で今回、坂井さんが企てられる文学史の試みは、私たちにまったく違った日本文学の扉を開けさせていくことになるかと期待しています。

